



プロステティック・ミンサーズ

朽techS 2014

Mature Content



Pretty Girls Make Graves

◆流鎗馬姫

◆焰なき祭壇

◇血塗れ人鳥VI

◇大鰐通りの大鴉

◆髑髏ヶ丘の踊り子

◆クレブシドラの統合者

◇告罪の大蛇

◇虚無唄い

◆征野を歩むもの

◆屍槽の守衛

◇調停の灰燼官

◇クラリモンドの無音死

◆デラモルテの執事

◆逢魔ヶ君

擬似的な時間、擬似的な空間。

擬似的な生、擬似的な死。

擬似的な物語、擬似的なあなた、擬似的なわたし。

やり方を教えてくれたブルーノ・シュルツへ。



苦痛から永遠に分かたれる死の願い。

影を潜めた愛は何と臆で快いことか。

陰鬱な海の彼方のナートにて、

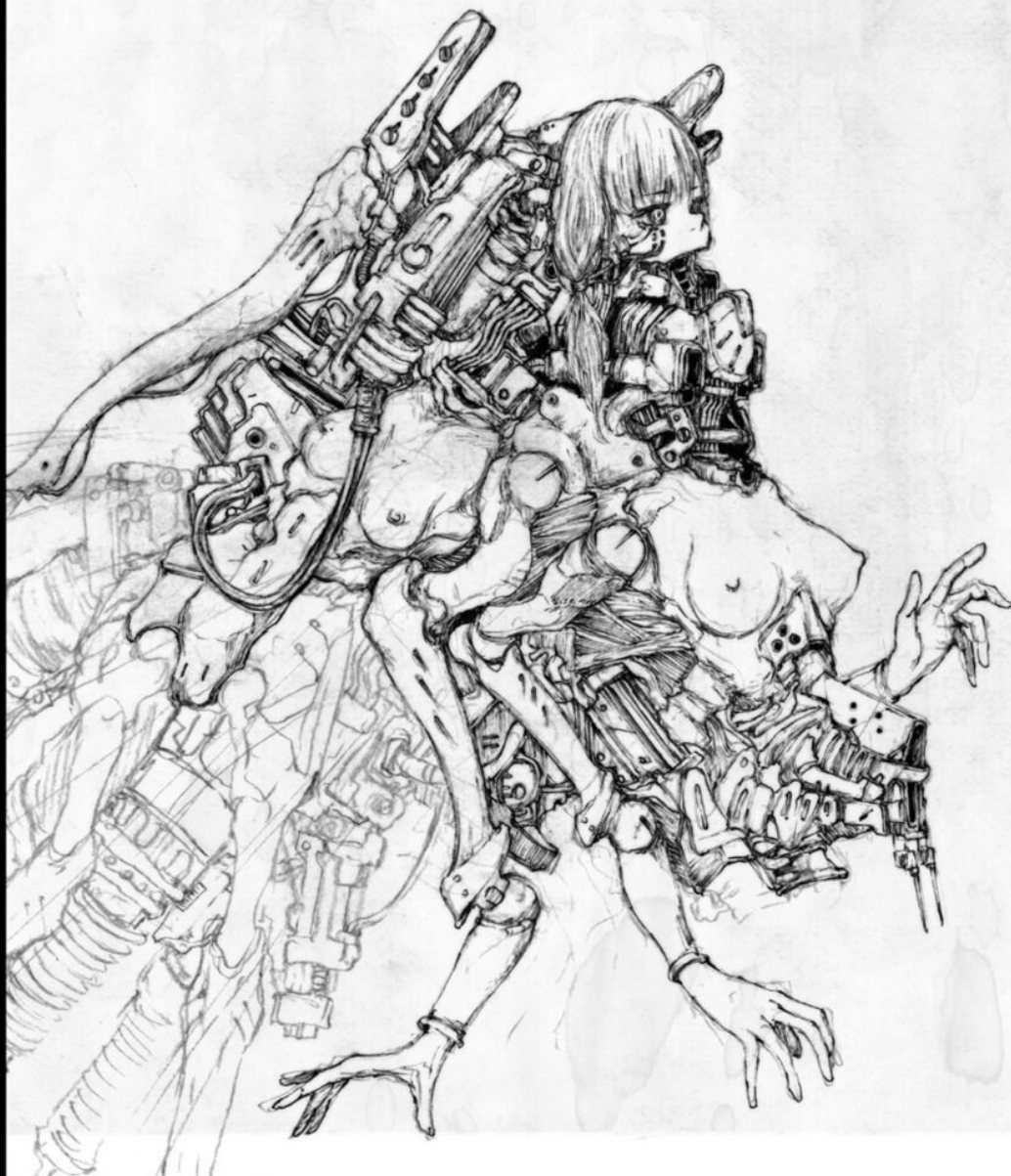
死んだ恋人たちが幸福を証す。

——クラーク・アシュトン・スミス『ナートの降霊術』

……土は甘い、温かい、妹が息をしているような匂いだ。

真っ暗な甕の中で、妹がもう一度地上へ出ようとしてもがき苦しみながら、
こんどこそ本当に死ぬのかと思うと、イサムは悲しみにも増して、
強い快感が身内をかけのぼるのをどうすることもできない。

——安土萌『春の妹』



◆ 流鏑馬姫 / Shooting Her Highness ◆

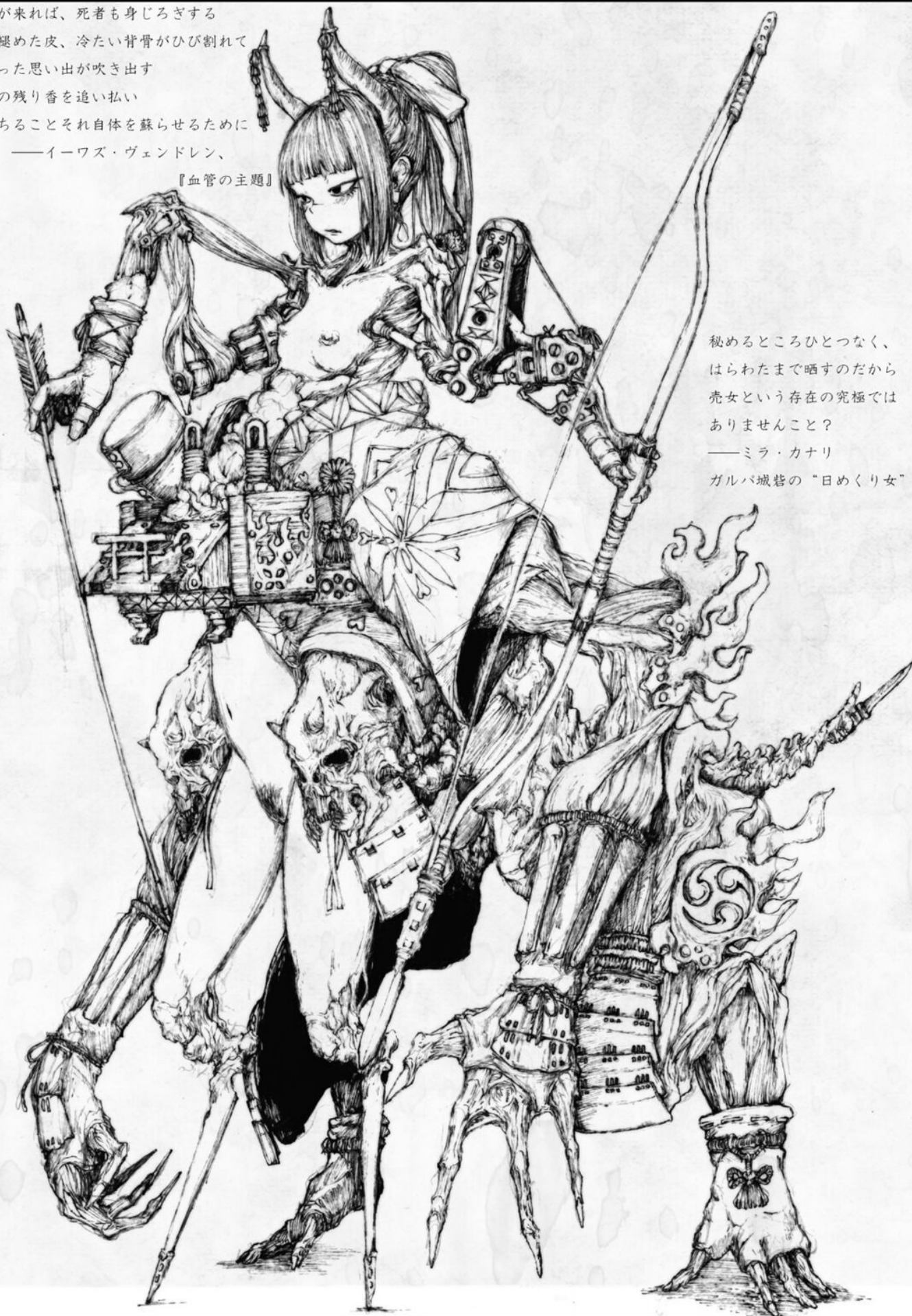
春が来れば、死者も身じろぎする
蒼褪めた皮、冷たい背骨がひび割れて
凝った思い出が吹き出す
冬の残り香を追い払い
朽ちることそれ自体を蘇らせるために
——イーワズ・ヴェンドレン、

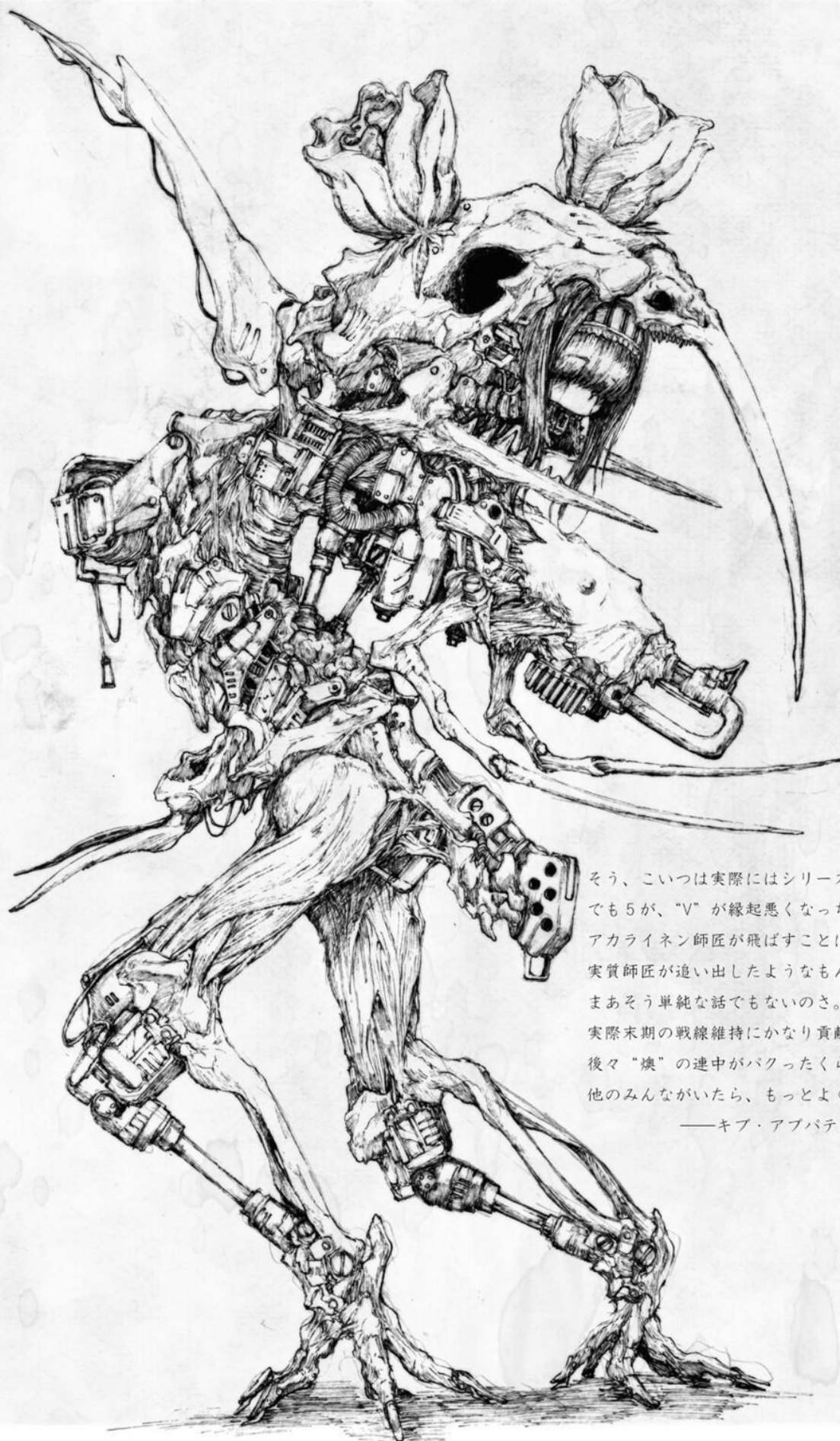
『血管の主題』

秘めるところひとつなく、
はらわたまで晒すのだから
売女という存在の究極では
ありませんこと？

——ミラ・カナリ

ガルバ城砦の“日めくり女”





そう、こいつは実際にはシリーズの5番目。
でも5が、“V”が縁起悪くなっちゃったから
アカライネン師匠が飛ばすことにしたのさ。
実質師匠が追い出したようなもんだったけど、
まあそう単純な話でもないのさ。それにこいつは
実際末期の戦線維持にかなり貢献してるんだ。
後々“燦”の連中がバグったくらいよくできてる。
他のみんながいたら、もっとよく出来ただろうけど。

——キブ・アブパティ、元下位マスター

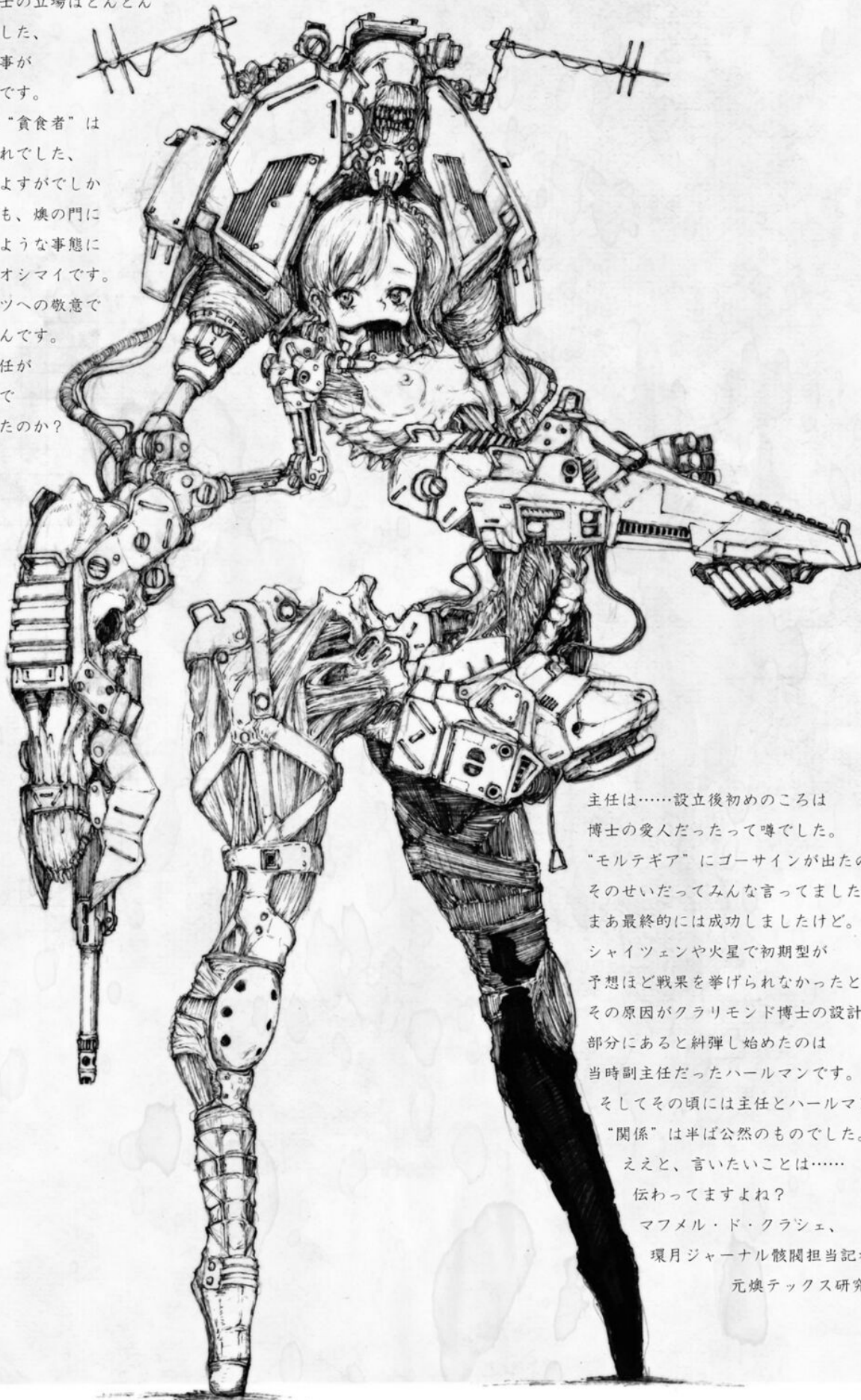
◆ 髑髏ヶ丘の踊り子 / Calvary Dancer ◆

クラリモンド博士の立場はどんどん

悪くなっていました、
その象徴的出来事が
煥の門番の交替です。

そりゃあ確かに“貪食者”は
すっかり時代遅れでした、
共和国の記憶のよすがでしか
ありません。でも、煥の門に
本当に敵が迫るような事態に
なったらどうせオシマイです。
だからこそルーツへの敬意で
あそこにあったんです。

ブルーノート主任が
どういうつもりで
あんなことをしたのか？



主任は……設立後初めてのころは
博士の愛人だったって噂でした。
“モルテギア”にゴーサインが出たのも
そのせいだってみんな言っていました。
まあ最終的には成功しましたが。
シャイツェンや火星で初期型が
予想ほど戦果を挙げられなかったとき、
その原因がクラリモンド博士の設計した
部分にあると糾弾し始めたのは
当時副主任だったハールマンです。

そしてその頃には主任とハールマンの
“関係”は半ば公然のものでした。

ええと、言いたいことは……

伝わってますよね？

マフメル・ド・クラシェ、

環月ジャーナル骸骨担当記者、
元煥テックス研究員

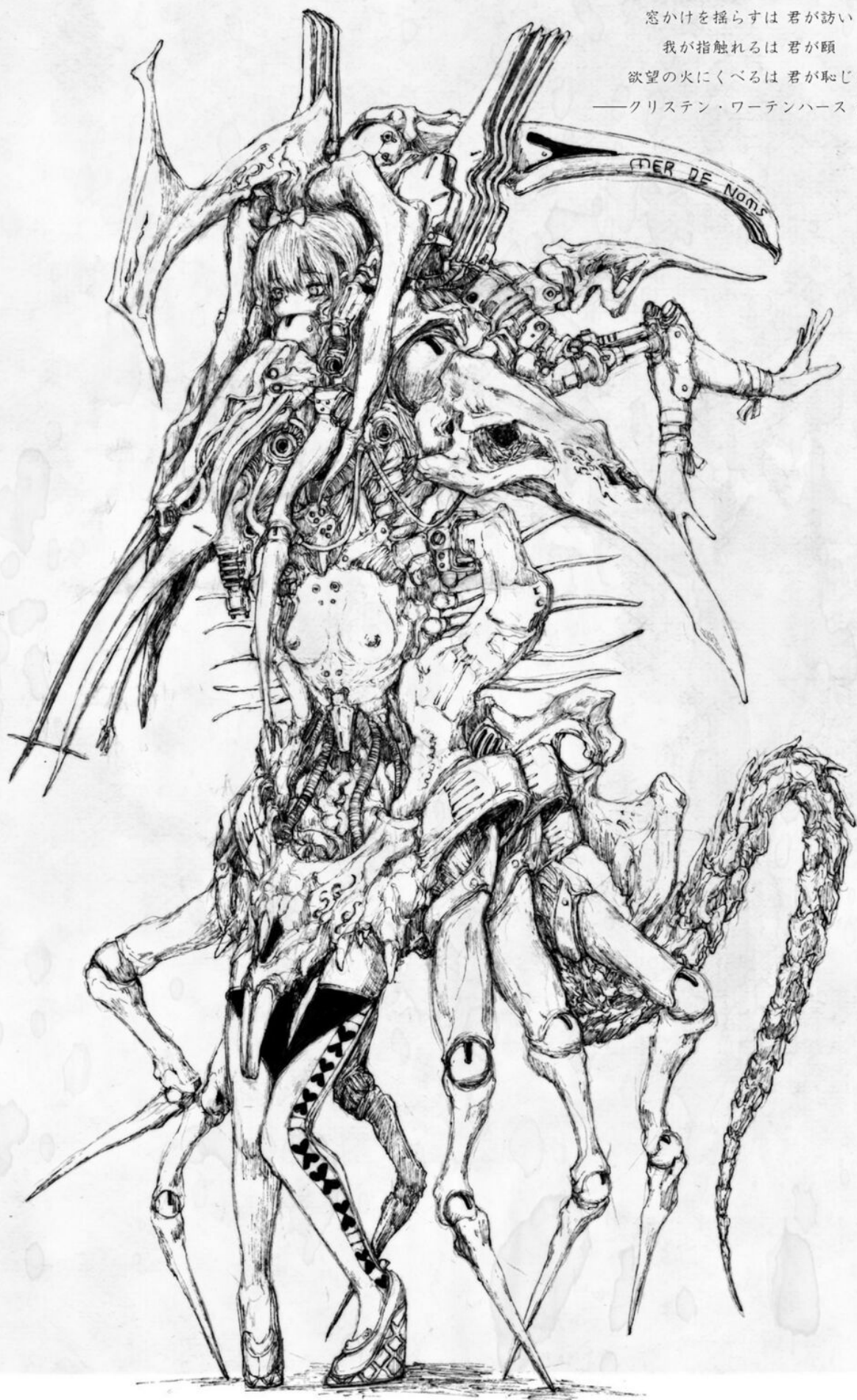
◆ 告罪の大蛇 / Sentence Serpent ◆

窓かけを揺らすは 君が訪い

我が指触れるは 君が願

欲望の火にくべるは 君が恥じらい

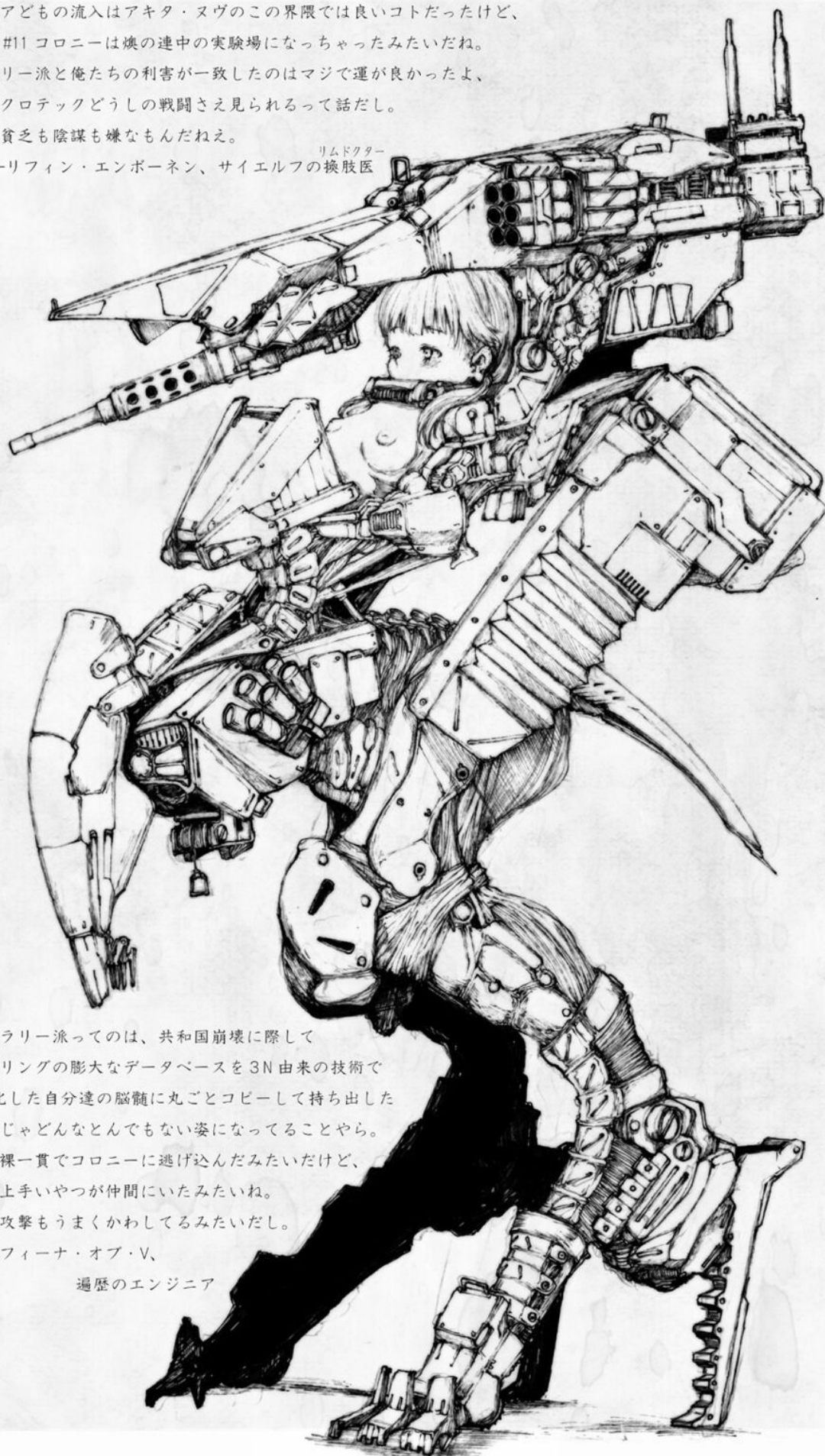
——クリステン・ワートンハース『肉屋の魅』



◆ 征野を歩むもの / Battlefield Strider ◆

亡国エンジニアどもの流入はアキタ・ヌヴのこの界限では良いコトだったけど、
同じ環月でも #11 コロニーは燠の連中の実験場になっちゃったみたいだね。
駆体ライブラリー派と俺たちの利害が一致したのはマジで運が良かったよ、
火星じゃあネクロテックどうしの戦闘さえ見られるって話だし。
へへへ、本当貧乏も陰謀も嫌なもんだねえ。

——リフィン・エンボーン、サイエルフの換肢医
リムドクター



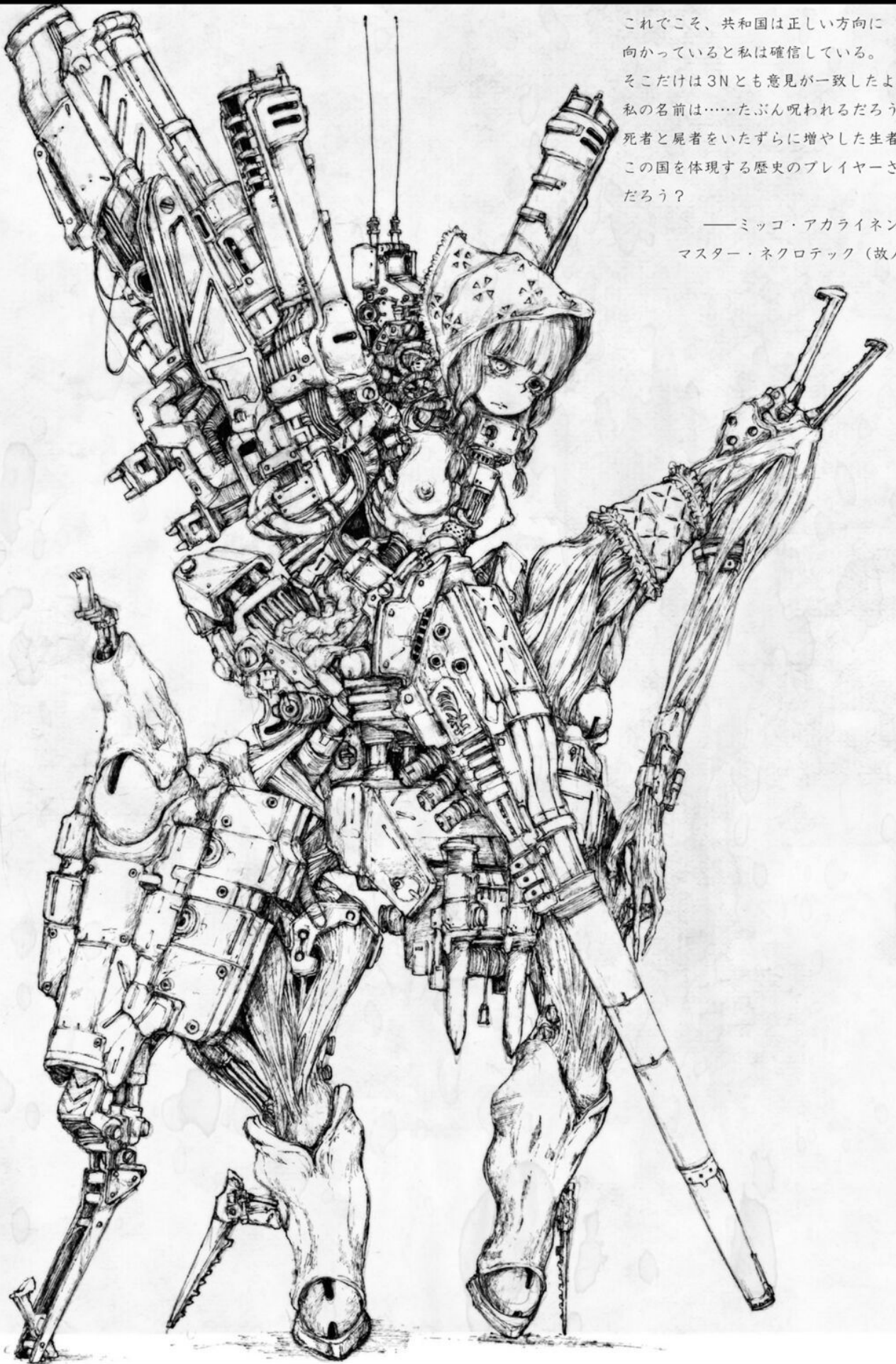
駆体ライブラリー派ってのは、共和国崩壊に際して
エンジニアリングの膨大なデータベースを3N由来の技術で
“半屍者”化した自分達の脳髄に丸ごとコピーして持ち出した
連中よ。今じゃどんなとんでもない姿になってることやら。
情報以外は裸一貫でコロニーに逃げ込んだみたいだけど、
立ち回りの上手いやつが仲間にいたみたいね。
燠の執拗な攻撃もうまくかわしてるみたいだし。

——ユーゼフィーナ・オブ・V、
遍歴のエンジニア

◆ 調停の灰燼官 / Peacemaking Ruiner ◆

これこそ、共和国は正しい方向に
向かっていると私は確信している。
そこだけは3Nとも意見が一致したよ。
私の名前は……たぶん呪われるだろうな。
死者と屍者をいたずらに増やした生者。
この国を体現する歴史のプレイヤーさ、
だろう？

——ミッコ・アカライネン、
マスター・ネクロテック（故人）



◆ デラモルテの執事 / Butler Of Dellamorte ◆

行方不明だったデラモルテ様がわたくしどもの
屋敷に現れたのはそう、72年の秋……お嬢様が
9歳の誕生日を迎えた日の、朝でした。

そうですね、クロンダイク骸閥の名が
国際社会にも広まってきた頃でございました。

それでデラモルテ様もお気付きに
なったのでしょうか。それはもう
大急ぎでご主人様にお伝えしました。

ただ、それが良かったのかどうか……

それから20年後のことですけれどね。

“あの夜”の話は娘にお訊ねください、
わたしにはとても……申し訳ございません。

——イエフゲニー・マハル、

クロンダイク家執事長



◆ 焰なき祭壇 / Fireless Altar ◆

火星じゃあネクロテックはおろかゾンビ禍のことさえ知らない連中がほとんど。

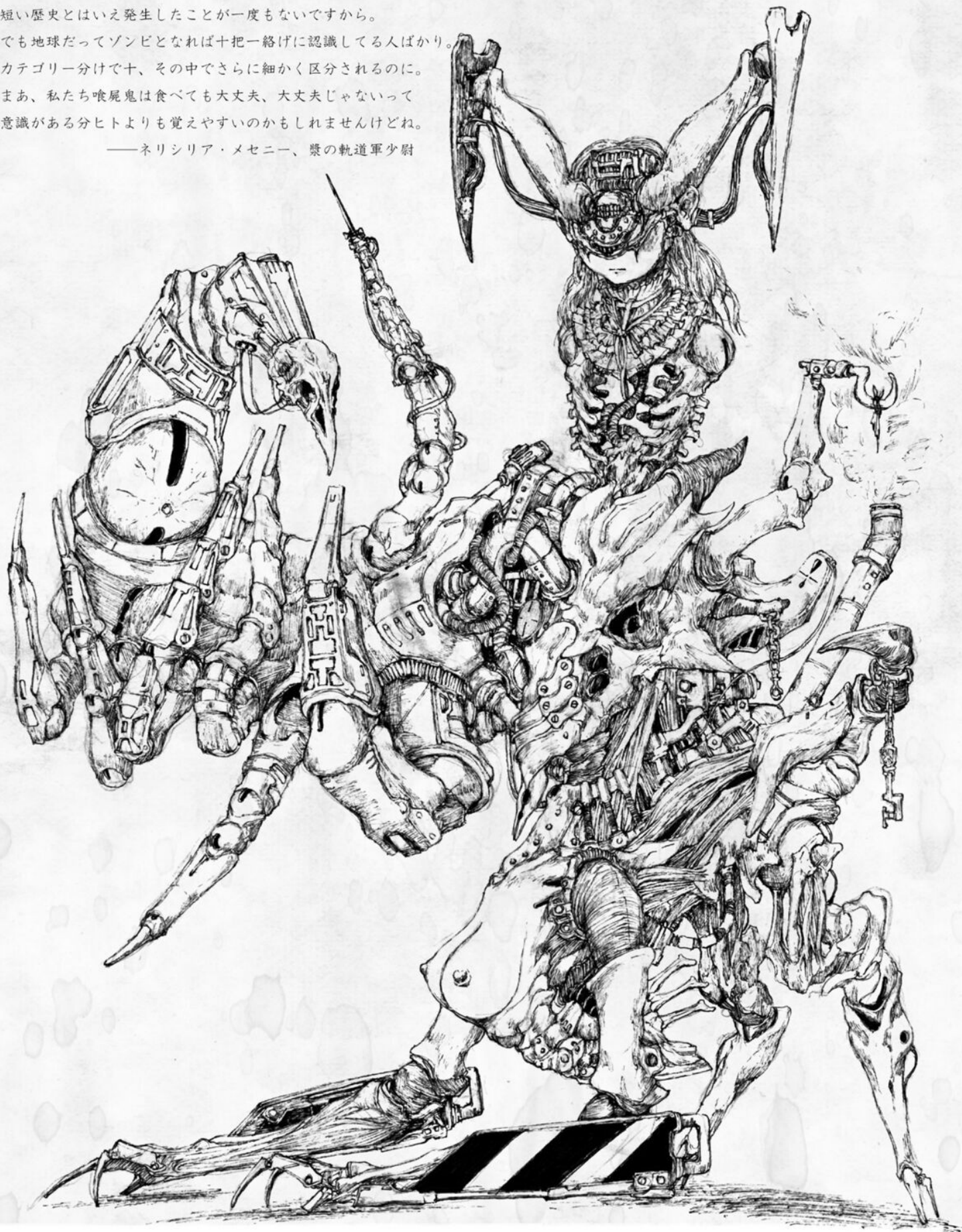
短い歴史とはいえ発生したことが一度もないですから。

でも地球だってゾンビとなれば十把一絡げに認識してる人ばかり。

カテゴリー分けで十、その中でさらに細かく区分されるのに。

まあ、私たち喰屍鬼は食べても大丈夫、大丈夫じゃないって意識がある分ヒトよりも覚えやすいのかもしれないけどね。

——ネリシリア・メセニー、熾の軌道軍少尉



◆ 大鰐通りの大鴉 / Raven Of Crocodile Street ◆

君、これまでの人生で一度ならず抱いた女が
屍者歩きしているのを目の当たりにした経験は？
お薦めはするわけじゃあないが、
独特のゾクゾクがあるぜ。
腰の辺りの動きとかが“あのとき”と
オーバーラップして……おい、
なんだその顔は。

——ガイド・ソアヴィ、大白壁の戦闘術師

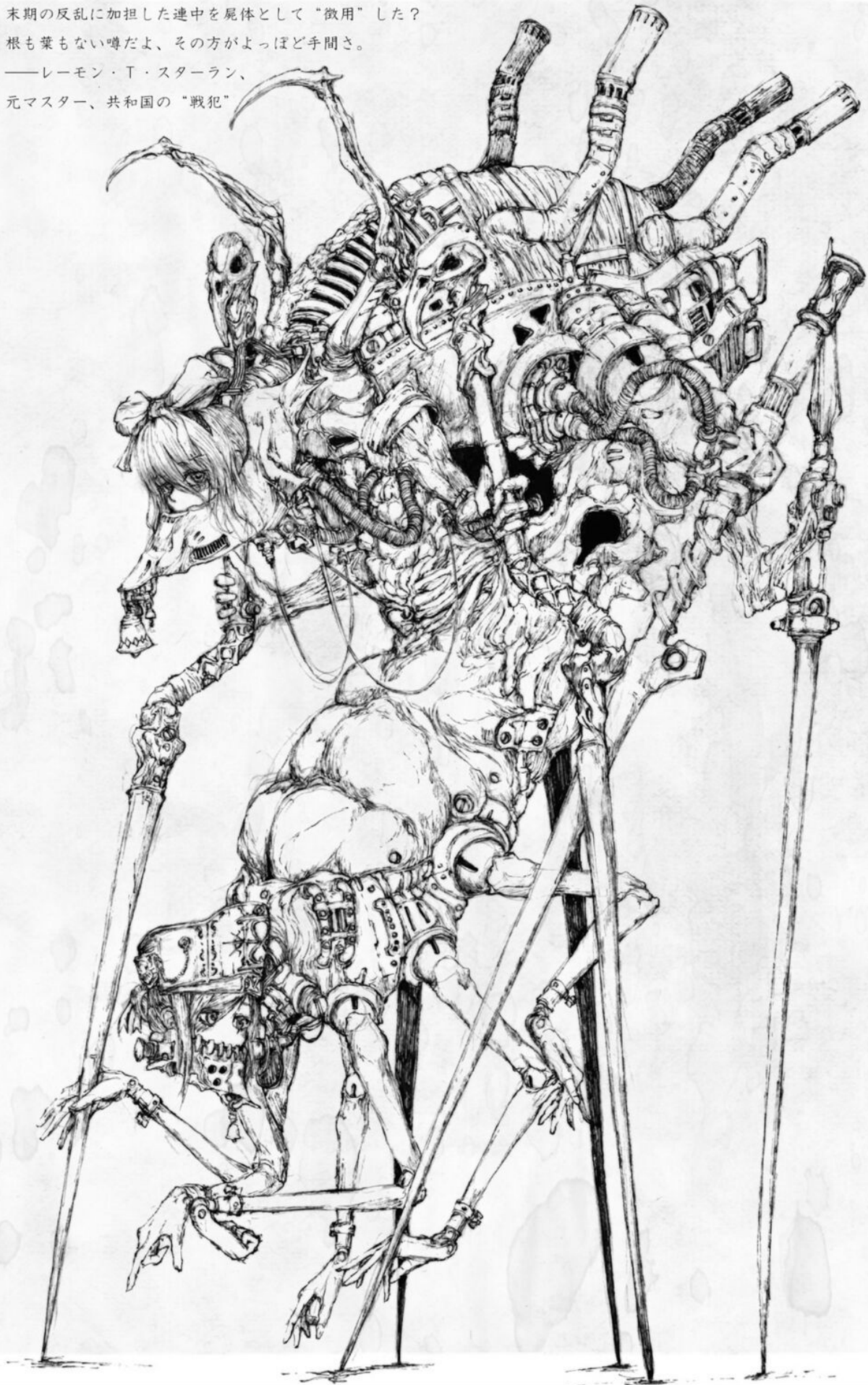


◆ クレブシドラの統合者 / The Hourglass Synthesizer ◆

末期の反乱に加担した連中を屍体として“微用”した？

根も葉もない噂だよ、その方がよっぽど手間さ。

——レーモン・T・スターラン、
元マスター、共和国の“戦犯”

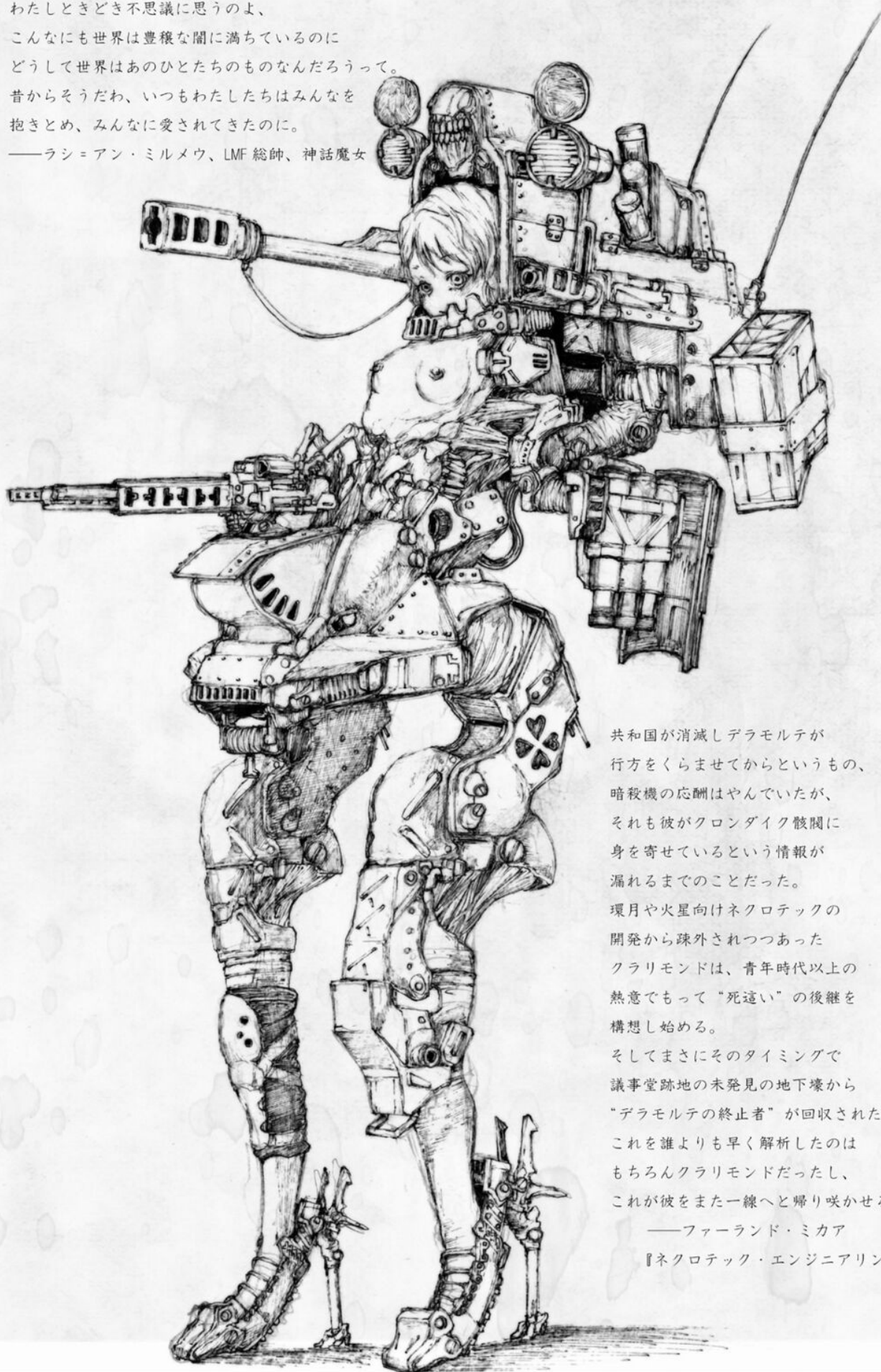




死せども立てるオイレンシュピーゲル、
定命の則を転覆せん……つまり、予め
死んでおけば“メンテナンス”の手間が
省ける、というのが3Nの要約してみせた
ネクロボークの理念です。酷いベテンでしたが。
——マルテ・ヘッツェヴァイケン、下位マスター

◆ 屍槽の守衛 / Morgue-vat Guard ◆

わたしときどき不思議に思うのよ、
こんなにも世界は豊穡な闇に満ちているのに
どうして世界はあのひとたちのものなんだろうって。
昔からそうだわ、いつもわたしたちはみんなを
抱きとめ、みんなに愛されてきたのに。
——ラシ=アン・ミルメウ、LMF 総帥、神話魔女



共和国が消滅しデラモルテが
行方をくらませてからというもの、
暗殺機の応酬はやんでいたが、
それも彼がクロンダイク骸骨に
身を寄せているという情報が
漏れるまでのことだった。
環月や火星向けネクロテックの
開発から疎外されつつあった
クラリモンドは、青年時代以上の
熱意をもって“死這い”の後継を
構想し始める。
そしてまさにそのタイミングで
議事堂跡地の未発見の地下壕から
“デラモルテの終止者”が回収された。
これを誰よりも早く解析したのは
もちろんクラリモンドだったし、
これが彼をまた一線へと帰り咲かせる。

——ファーランド・ミカア

『ネクロテック・エンジニアリング』



わたしは“それ”を一瞬しか
見ませんでした、だからこそ
生き残っているわけです。
ミカル様、オータム様、
そして小さな小さなサリー様。
みな血の海に横たわっておりました。
ゾフィー様だけが一階でお休みでした故
助かりました。デラモルテ様の姿は
もうどこにもありませんでした。
壁に刻まれた燐のサインを前に
立ち尽くす私を、遅れて来た父が
叱咤してはじめて我にかえりました。
もう手の施しようがないことは、
誰の眼にも明らかでした。
どこまでが意図された襲撃だったのかは
今でも議論されるところではあります。
なにせよあの晩、技術的にも感情的にも、
あのお二方の戦いは別のステージに
移ったのだと思います。

——フローレン・マハル、
ゾフィー・クロンダイクの侍女

私の試みのすべて、それは 事物の黄昏を

ここにかたちをもって固定することに集約されるのだ。

——カッシウス・デラモルテ、最後のマスター・ネクロテック

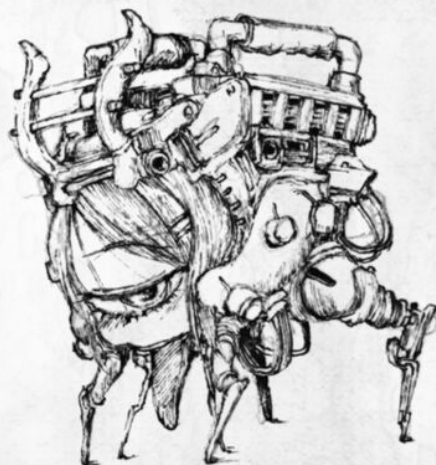


予め壊されていることによって、最早傷つくことができない、というのはネクロテックの基本概念ですが、ならば何故こんなにも“異形”で“怪物的”でなければならないのか？それは、破れ目から内側・裏側が反転して表面に現れているからだ、と考えることができるでしょう。機械的な部品がそこでシルエットを補います。そしてこの機械たちは、脆弱性を加速させるのです。機能的で繊細、という点においてマシンはある意味肉体よりも遥かに弱さを感じさせるときがあります。破壊され用をなさない、あるいは初めから意味を剥奪された金属たちは“補綴”し“補完”します。しかしそれは脆さを否定するのではなくその逆、「脆いということ」をより完璧にするということです。

怪物である、ということはとても弱いことです。吸血鬼の弱点の多さを思い浮かべてください。そして本当の意味で強い存在は悪を行いようがありません。それは正しいです。けれども、正しさはともすれば私たちの内包する弱さへの裏切りともなりえます。こんなにも私たちが怪物を愛し、その牙が肉を引き裂く場面に惹かれるのも、あるいは許されなかった弱さの復讐なのかも知れません。もちろん生きる者は、強さと弱さの間を行ったり来たりするものです。

怪物が敗れることを私たちは知っていて、心からそれに納得しさえするでしょう。ただ、この手先の技芸によって、秘めた弱さへの忠誠、完璧に弱いということに感じる美を、宣言出来ていたら嬉しいと思うのです。

とうとう5冊にもなりました。皆様のご愛顧のおかげでございます。今後とも少女屍体溶接をよろしく願いいたします。またお会いできるその日まで、半分だけの夕日の国より愛を込めてさようならと言わせていただきます。



奥付け

『プロステティック・ミンサーズ』

2014/05/05、COMITIA108にて発行

著者：メグリム・ハルヨ（朽techS）

連絡先：haruyoi@hotmail.co.jp

<http://unicaschamber.web.fc2.com/>

pixiv ID=133923

印刷所：ねこのしっぽ（有）様

